

豊かな言葉や表現につながる絵本の選択について

— オノマトペ絵本を中心に —

横田由紀子 鈴木ゆみこ

要旨

絵本は保育の場において、領域「言葉」を学ぶ上で重要な児童文化財であり、子どもの発達段階に合わせて各保育の場において選定されているが、多くは情操を育てるという点に重きをおかれているのではないだろうか。平成30年度から教育要領等が改訂されることを踏まえ、「言葉」というものを重点に据えて、絵本の選定について再考した。今回は、子どもが身体全体で反応する言葉として、多くの研究がなされている「オノマトペ」に注目し、「言葉の獲得」「言葉に対する感覚を豊かにする」「豊かな表現」という点から、「オノマトペ絵本」の持つ意義を検討した。また、従来赤ちゃん絵本として、2歳児以下に読み聞かせをすることが多い状況から、3歳以上児にも読み聞かせをする機会を増やすことの意味を、具体的にいくつか絵本を例にあげて考察した。

キーワード：言葉・児童文化財・オノマトペ絵本

I. はじめに

子どもが、言葉に関する感覚を豊かにし、言葉遊びなどを通して言葉を豊かにする上で、「絵本」はとても大きな役割を果たしている。幼稚園、保育所、認定こども園でも絵本は重要な児童文化財として、蔵書は多い。

保育の現場においては、子どもの情操を養う、物語性が豊かである、あるいは科学的な知識を養う等、様々な基準をもとに絵本を選んでいる。保育者が絵本の選定基準とするのは、子どもの年齢や発達がまず大きな要素である。だが、その他として「言葉」という点に焦点をあて、「言葉の獲得」「言葉に関する感覚を豊かにする」「豊かな表現」という視点から絵本を選定することに関してはどうであろうか。

本研究は、上記のように、子どもの「言葉の獲得」「言葉に関する感覚を豊かにする」「豊かな表現」という視点から絵本を選定することの重要性を、「オノマトペ絵本」を中心に考察する。

II. 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂

今回のテーマを設定した背景の一つに、平成30年度から実施される教育要領等の改訂がある。どのような内容となるか簡単にまとめておく¹⁾。

平成30年4月1日に改訂される新しい幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の中で3歳以上児の領域(言葉)のねらい・内容・その取扱いについては次のように捉えられている。「()内の文章は保育所保育指針〈 〉内は幼保連携型認定こども園のみ記載」

言葉

【経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。】

1 ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語に親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生(保育士等)〈保育教諭等〉や友達と心を通わせる。

2 内容

- (1) 先生(保育士等)〈保育教諭等〉や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。
- (2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
- (3) したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。

1) ・文部科学省ホームページ
・厚生労働省ホームページ
・内閣府・子ども・子育て本部ホームページ
・無藤 隆 汐見稔幸 砂上史子 2017年『ここがポイント3法令ガイドブック』—新しい「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の理解のために—「株式会社フレイベル館」53頁

- (4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- (5) 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- (6) 親しみをもって日常の挨拶をする。
- (7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- (8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- (9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。
- (10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通じて次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児(子ども)〈園児〉が教師(保育士等)〈保育教諭等〉や他の幼児(子ども)〈園児〉と関わることにより心を動かされるような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。
- (2) 幼児(子ども)〈園児〉が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師(保育士等)〈保育教諭等〉や他の幼児(子ども)〈園児〉などの話を興味をもって注意して聞くことを通じて、次第に話を理解するようになっていき言葉による伝え合いができるようにすること。
- (3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。
- (4) 幼児(子ども)〈園児〉が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通じて、言葉が豊かになるようにすること。
- (5) 幼児(子ども)〈園児〉が日常生活の中で文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。

ここで示す「ねらい」は、幼稚園や保育所、幼保連携型認定こども園において育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたものであり、「内容」は、ねらいを達成するために指導する事項である。

今回の改訂では、ねらいの(3)に言葉に対する感覚を豊かにしという文章が加えられた。またこれに連動して、内容の取扱いでは(4)が新設された。今までの言葉の理解とそれを育てる絵本や物語に接すること、先生(保育士等)〈保育教諭等〉や友達と言葉により心を通わせることだけではなく言葉の感覚が入ったことになる。言葉の感覚とは言葉の響きやリズムに敏感になることである。そのためには、言葉そのものへの関心を促し、言葉の楽しさや面白さや微妙なニュアンスや音の響きに気付くようにしていかなければならない。そのための絵本や物語や言葉遊びなど、どのような児童文化財を選択するかは大変重要になってくると考える。

III. 言葉の獲得に必要な信頼関係

そもそも言葉はどのようにして獲得されるのだろうか。

産まれたばかりの赤ちゃんが夜泣きをして困る。そんな時に親はどうしているだろうか。ほとんどの親は「オムツが濡れたの?」「お腹が空いたの?」などという言葉で無意識に話しかけている。もちろん、赤ちゃんは言葉で返事を返してくるはずはない。だが親は一生懸命やさしくマザーリーズを繰り返して、褒めたり、なだめたり、時には叱ったりと必死である。そのような繰り返しの中から子どもは、自分が泣いたり、ぐずったりして不快感を表すことで、親が自分の気持ちを理解してくれる存在であることを認識していく。子どもにとって言葉(音声)は自分と親を繋ぐもの、自分の思いを伝えてくれたり、自分を褒めてくれたり勇気づけてくれるものと理解していく。そして子どもは「自分と親を繋ぐ言葉」への信頼感を持ち、言葉を使って他者とのやり取りをしたいという意欲が出てくる。つまり「言葉の獲得」は、「この人は頼りになる。自分のことを理解してくれている。という信頼関係を基に他者とのコミュニケーションから獲得」されるものである。保育現場では、子どもは乳児期が過ぎて幼児期に

なってくると、保育者をはじめ、たくさんの友達と関わるが増えてくる。その中で保育者が子どもに心を動かす体験をさせ、言葉を交わす喜びを味わえるようにすることで言葉はますます育っていくこととなる。また、子どもは自分の思いを言葉で伝えると共に、保育者や友だちの話に興味を持って注意深く聞くことを通して、次第に言葉の意味を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようになっていく。以上のことから、保育現場では特に、保育者の子どもの言葉を育てるための視点は大切になってくる。

IV. 言葉の発達の過程とそれを促すもの

子どもの「言葉の獲得」の過程を確認すると、次のようになる。

1. 前言語期

〈信頼する人との応答が言葉を生む〉

産まれたばかりの赤ちゃんは、オギャーと大きな産声を出し肺呼吸を始める。この大きな声はオムツが濡れた時や空腹時などに出し、しばらくの間続く。「こんな小さな身体からよくこんな大きな声が出るものだ」と感心する。1カ月も過ぎると「アーウー」とご機嫌な時に出す声、クーイングが出てくる。3カ月になると「ママママ」という声の喃語を出し始め、5～6カ月になると「ムムムム」という反復喃語が出てくる。これは傍に人がいる時に多く出ると言われている。この時期は身近な大人との身体的接触と目線の交流によって、身体や音声リズムが響き合い、お互いの身体リズムが伝わり合う時期である。スキンシップ遊びや手遊びなどをふんだんに取り入れて心の安定と応答の楽しさを伝えたい。

〈言葉の理解から発語へ〉

8カ月も過ぎると一語文(パパ・ママ)や指差し行動を伴う言葉(ワンワン)が出てくる。今までの二項関係(自分と犬)が三項関係(自分とママと犬)の理解に広がり、ワンワンと指さして何かを母親に伝えてくる。指差し行動には、指さす対象物や意味をイメージして思い描く力の発達がある。大人がその内容を言語化して「ワンワン、いるね」と丁寧に返すことにより、指差し行動がしだいに言葉に移行していく。この時期から言葉をコミュニケーションの道具として使い始める。大人の「～したいんだね」という、受容や代弁の言葉が大切な時期である。また、この時期に取り入れたいものにイナイナイバーを代表する伝承遊びがある。伝承遊びは目と目、手と手を合わせて行う動作を伴い、日本独特の音階の心地よい歌で自然と口ずさみたくなるものが多い。大人との歌や遊びを通して多くの言葉と出会う機会となる。さらに取り入れていきたい物に絵本がある。この時期の絵本は、破いたり口に入れたりする時期なので布絵本が好まれる。読み聞かせというより、大人と子どもが絵本を媒体にして言葉のやり取りをするのが中心である。膝に乗せ、ゆったりとした時間を持ちたい。

2. 幼児期

〈2語文から3語文へ・イメージを話す〉

子どもが初めて話す意味のある語彙を初語という。一語文でいろいろな意味を伝えるが、それを卒業し2歳頃になると二語文(パパ オシゴト)を話すようになる。また(これナニ?)とさかんに名前を聞く質問期に入る。大人に回答してもらい語彙は爆発的に増えて来る。1歳児で数語だったのが2歳児では300語までわかるようになると言われている。語彙の増加の背景には、表象機能(イメージ)の発達があると言われている。目の前にないものをイメージできるようになり、遊びもどんどん変化していく。見立て遊びからごっこ遊びへと発展していく時期である。スプーンはごはんをたべるもの、帽子は頭にかぶるものなど、ものの名前と機能が一致してくる。このころの絵本は、色がはっきりしていて単純な図柄のものに興味を持ち、会話の繰り返して構成されている内容を好む。大人が飽きてしまうほど「もう1回、もう1回」と何度も同じ絵本をリクエストされることが多くなって来る。またこの頃は自我の芽生えから自分で何でもやりたいと言い張り、さらに友達の実存も気になって来て、ケンカが絶えなくなってくる。ひっかきと噛みつきは時期である。二語文や三語文は話せても、まだまだ言葉で自分の気持ちを伝えることはできない。大人がそれぞれの気持ちを代弁し、自分の気持ちに折り合いをつけさせてあげることが必要だ。

〈日常会話の成立〉

3歳頃になると(これナニ?)という第一質問期から抜け出し(どうして?)(なんで?)という第二質問期に入ってくる。語彙も増え3歳頃で1000語は身に付けるという。助詞の使い方も正確になり、接続詞を使ったりもできるようになる。日常的な会話は成立してくる。友達と同じ場を楽しむようになり、集団への参加場面が増える。しかし、自我意識もますます強くなりケンカが増加する。仲直りの言葉での表現はまだ未熟で、大人の代弁が必要である。この頃になると、大人や友達と絵本を通してイメージを共有し、想像力を豊かにして絵本を楽しむようになってくる。絵本の絵から物語を読み取り、文字が読めなくてもお話を想像できるようになってくるのである。絵と文章が一致した優れた絵本を選びたい。

〈言葉を創造する〉

4歳頃になると、おしゃべりの時期と言われ特に女の子におしゃべりさんが多くなる。過去・現在・未来の時間の区別が明確になり、時間に沿って順序立てた話ができるようになってくる。体験したことと見聞きしたことを重ね合わせてイメージを膨らませて、想像遊びを楽しむ。言葉を使って仲間とごっこ遊びのストーリーを作り、物語の主人公に興味を持って、自分なりのお話を作り語って楽しむ。また、ごっこ遊びを通して、役決めや道具の使い方などをめぐって自らの意見を主張し、互いの希望を調整することで、人と関わるために必要なコミュニケーションとしての言葉の表現方法を身に付けていく。この時期になると子どもの世界もグンと広がり、日々の生活の中での人間関係も複雑になり、感情の喜怒哀楽だけでなくいろいろな感情(いたわり・思いやりなど)も大人に近づく。物語絵本の中で現実にはない世界に興味を持ち、友達と共感しながら想像力を働かせ心を揺り動かす。たくさんのおもしろい言葉、文章、物語で書かれた絵本を選びたい。また長編のものに挑戦し何日もかけて読むのも良いだろう。この時期に注意したいことは、大人が驚くような乱暴な言葉や場にそぐわない言葉を、子どもが使いはじめることである。テレビなどの影響や周りの大人の言葉環境も大いに影響するのだが、あまり神経質に受け止めず、子ども自らが試そうとしている言葉表現なのだと考えて、やんわりと正してやり、おおらかに見守りたい。

〈言葉で考える〉

5～6歳頃になると大人と同様の会話をすらすらと話すようになる。相手の話を聞く力も付いてくる。言葉の持つ機能の外言(コミュニケーション機能)と内言(思考の機能)を使いこなす、内言で考えてから必要な事だけ言うようになってくる。論理的な思考や言葉による概念も理解するようになり、例えば(幸せってどんなこと?)という質問に真剣に考え答える姿も見られる。また文字への興味が強くなる。そもそも言葉には話し言葉と書き言葉があり、書き言葉は読むことと書くことに分けられる。一般的には読むことの方が先にできるようになる。その理由は読むのは視覚能力が基盤であり、書くことは視覚能力と手・指先を動かす能力や図形や方向などの認知能力も必要だからと言われてる。また3歳では言葉を読む時に1つの記号や絵のように覚えて読むのに比べ4歳では言葉は音節から成り立っていることを理解して分解して読むようになる。さらに5歳になると音と文字が対応していることを理解して、しりとり遊びや頭同じ言葉集め(あのおつ言葉を集める)などの言葉遊び・カルタなどを友達と楽しむようになってくる。さらに文字を読めるようになってくると、書くことへの興味が強くなってくる。

〈文字との出会い〉

この時期は「鏡文字」や筆順の乱れなどが多く見られるが、強制的に正そうとするよりも、自分の名前や興味のある遊びから文字への関心を高め、文字に慣れさせることが大切だ。文字を覚えたからと言って、すぐに文字で自分の考えや思いを表現できたり、書かれた文章の内容を理解できたりするわけではない。書き言葉の世界に入るためには、言葉を使うことにより(伝え合う力)や(考える力)、(想像する力)、(喜び・悲しみなどを感じ取る感覚)が育っていなければならない。これらの力は「読む・書く」の力の基礎となる。そして、この力は豊かな話し言葉の経験から育っていくものである。よって書き言葉習得前の乳児のころからの「豊かな話し言葉の習得」が大切だということになる。

3. 豊かな言葉習得のためには

保育現場では、子どもたちは楽しく遊ぶために、様々な言葉が必要になる。自己の主張を訴える言葉、相手と折り合いをつける言葉、思いやりの言葉、慰めの言葉、様々な言葉は遊びを通して身に付ける。楽しい遊びを十

分経験すること、それが豊かな言葉を育てることに繋がっていると言える。また絵本の読み聞かせも欠かせない。絵本の読み聞かせ体験は、単に内容が伝えられるだけではなく、読み手と聞き手のコミュニケーションが、想像力、感受性を育み、そこから言葉を獲得する力を育てる。読むということは、感受性を働かせ想像力を働かせながら書かれた文章の世界に参入し、自分の世界を創造していくことだ。書き言葉に入ろうとする幼児期には、そうした読みができるようになることも大切である。また豊かな感性と表現は、日常生活の中で心を動かす出来事に触れ、心の中の感動があふれ出し、幼い年齢では身体動作や声として現れる。言葉を獲得していくと言葉としての表現として現れてくる。子どもは突然、豊かな感性や表現する力を身に付けるわけではない。大人は子ども自身の表現しようとする意欲を受け止め、子どもの生活体験や年齢に応じた様々な表現を楽しませ、意欲を發揮できるような環境への配慮をすることが、言葉に対する感覚を豊かにすることにも繋がるのである。

4. 言葉を育てる児童文化財

子どもの遊びを誘い出し、創造力や情操を育てるために用意されたものを児童文化財という。おもちゃや遊具、絵本や紙芝居などの有形文化財と、遊びやわらべ歌、童話や物語などの無形文化財がある。特に絵本の読み聞かせは、聞く力やイメージする力の促進をはじめとして様々な言葉の発達を促す。紙芝居は絵を見ながら音を合わせて参加することが出来るし、絵本はストーリーや主人公になりきる体験が、人生へのイメージを豊かにする。友達と言葉のやり取りによってイメージを膨らませつつ構成する物語づくりや劇ごっこも、言葉の発達に大きな影響を与える。言葉を使って想像の世界を広げていく活動は、小学校における言葉の学びへとつながる。子どもにとって遊びや体験から生まれるイメージを表現する手段が言葉であり、イメージの豊かさが言葉の発達を生み出す。様々な文化財との出会いや心弾む体験を、大人はよく吟味して子どもたちに用意しなければいけない。

V. 「言葉に対する感覚を豊かにし」「言葉が豊かになるようにする」ことに効果があるオノマトペという語句

1. オノマトペとは

平成30年4月1日に幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂されることをきっかけに、オノマトペの持つ効果も含めて、豊かな言葉や表現につながる絵本の選択を再考する良い機会なのではないかと考える。

オノマトペという言葉はフランス語で、擬音語を意味する言葉である。動物の鳴き声や、風の音など、実際の音をまねて表現する語句であり、日本語には極めてオノマトペが豊富である。また、一般的に擬態語も(「にやにや」「ふらふら」「ゆったり」の類。視覚・触覚など、聴覚以外の感覚印象をことばで表現した語。〈広辞苑〉)オノマトペに含めて使われている。多様なオノマトペは、豊かな表現を可能にする。「風が強く吹く」という表現と「風がビュービューと強く吹く」という表現を比較する場合、後者のほうがより具体的に強さを感じることができる。オノマトペは文の成分から言うと「修飾語」にあたる。「修飾語」は、文の中で、「どのように」とか「どんな」というように、内容を説明して深める働きをする。そのためオノマトペがあることによって、より具体的なイメージを持つことができる。

例、昨日の夜に雨が降った。

これだけでは、雨がどんなふう降ったのかわからない。この文を豊かな表現の文にするためには、修飾語がいくつか必要になる。例えば「たくさん」「少し」などを付け加えると

- ・昨日の夜にたくさん雨が降った。
- ・昨日の夜に少し雨が降った。

となる。だが、次のようにすると印象はどう変わるだろうか。

- ・昨日の夜に、ザーザーと音をたてて、雨がたくさん降った。
- ・昨日の夜に、しとしとと少し雨が降った。

雨の様子が、より想像しやすくなるのではないだろうか。オノマトペにはそういう働きがある。

オノマトペは文章の中に入れて書こうとしてもうまくいかない場合がある。自分が表現したいものと一致するオノマトペを見つけることはなかなか難しい。うまく使っていくためには知っているオノマトペを増やす必要がある。また、オノマトペは独特なため、文学作品やその他の文章、どれにでも使えるわけではないこともある。

さらに、無理に創り出したオノマトペでは不自然な表現になることもある。

オノマトペは極めて感覚的な言葉であり、また、オノマトペは人の感性に訴える言葉であるとも言える。

2. 子どもとオノマトペに関する先行研究

オノマトペと子どもの関係については、言語研究、心理面からの研究、障がいを持った子どもとオノマトペ等、多方面から研究されているが、どの研究においても共通して、子どもが、意味を持たないオノマトペにも反応することが指摘されている。オノマトペの持つリズムが、子どもの感性に直接訴え、子どもは身体全体でオノマトペを受け止めるのである。

オノマトペが多く使われ、中心的な存在となっている絵本を「オノマトペ絵本」と呼んでいる。「オノマトペ絵本」と子どもとの関係についての研究に、日本女子大学石井光恵、甲斐聖子、蘇懿禎の共著「赤ちゃん絵本とオノマトペ」²がある。この研究は、実際に保育園で子どもと絵本の読み合いをしながら、赤ちゃん絵本とオノマトペについて考察したものである。

石井らの研究は、第1章では甲斐が、「赤ちゃん絵本から幼児絵本へ ―オノマトペ絵本の可能性―」と題し、保育園で2、3歳児を対象に読み合いをし、その事例をもとにして、子どもたちが「どのような場面に反応し、楽しむのか」を考察している。また、第2章では、蘇が「ブックスタート赤ちゃん絵本におけるオノマトペについて」と題し、特定非営利活動法人ブックスタートが厳選した赤ちゃん絵本(2001-2009年)を分析して、オノマトペが赤ちゃん絵本の中にどのように使われているか、また使われているオノマトペがどのようなものかを明らかにした。ここでは、分析の結果として、「赤ちゃん絵本でオノマトペがない絵本が想像より多かった」という点が意外であった。蘇らと同じように、オノマトペは、意味がわからなくても子どもが反応するため、赤ちゃん絵本には必ずといっていいほど多いのだろうという思い込みが、私たちの間にはあるのだ、と気づかされる結果であった。第3章では、石井が「絵本と子供とオノマトペ」と題して、オノマトペと絵本、オノマトペと子どもの関係性を考察している。石井は「絵本に身体性がシンクロする形で、子供の体を動き出させるのだと思われる。」「感覚的な言葉であるオノマトペが絵と結びつくとき、子どもの感覚を音楽的にも刺激する」などとした。また、石井は、「オノマトペという『感覚の言葉』を幼い子どもたちと共有することに腐心するようで、それが赤ちゃん絵本にも反映されていくのは、ある意味自然なことなのかもしれない。」とも述べている。

このように、オノマトペに関しては、これまで子どもの「感覚」を刺激し、体を使って子どもは受け止める、という認識で論述されてきた印象がある。だが、「言葉の獲得」という観点から考えると、オノマトペには、まだまだ重要な働きがあるのではないか。

そこで、実際に保育の現場ではどのような「オノマトペ絵本」を子どもたちに読み聞かせているのか、また、その際に子どもたちの反応はどのようなものか、の2点を学生に依頼して実習期間中に調査した。学生が読み聞かせをする際に、できれば1冊「オノマトペ絵本」を選択し、読み聞かせた時の子どもの様子を、学校に戻った時に記録して提出することとした。その結果は次の章に示すとおりである。

VI. オノマトペ絵本の読み聞かせ実施アンケート

調査内容：保育科2年生(保育実習Ⅱ・教育実習Ⅱ)の保育所及び幼稚園・幼保連携型認定こども園等での実習時にオノマトペ絵本の読み聞かせを行い、その際の学生から見た子どもの反応を集計し分析を行う。

分析方法：平成30年4月1日に改訂される幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の領域(言葉)のねらいに新たに加わる「言葉に対する感覚を豊かにし」に焦点を当て、そのための具体的な経験として次の3つの項目を設定する。A(言葉への関心が促される)B(言葉の楽しさ・面白さを味わっている：身体を動かすなど子どもが楽しさなどを表出している様子)C(言葉の微かなニュアンス・響きを楽しんでいる：音の微妙な違いなどを楽しんでいる様子)の3項目でオノマトペ絵本の読み聞かせから表出された子ども(0～5歳児・約270人)の反応を分類し分析を行う。

調査場所：札幌市等の保育所及び幼稚園・幼保連携型認定こども園等35カ所

調査日：2017年8月から2017年9月

調査対象：保育科2年生35人(絵本数35冊)

2 蘇懿禎・甲斐聖子・石井光恵
2010年「赤ちゃん絵本とオノマトペ」日本女子大学大学院紀要 家政学研究所・人間生活学研究所 第16号1頁-11頁

分析結果：

オノマトペ絵本の読み聞かせ時の子どもの反応を0～1歳児、2歳児、3～4歳児と異年齢組に分類し集計する。その結果をABCの項目で分類し分析する。ABCの項目別に比較すると図1のとおり、すべての年齢の平均でA(言葉への関心が促されている)は18.3%、B(言葉の楽しさ・面白さを味わっている)は64.4%、C(言葉の微妙なニュアンス・響きを楽しんでいる)は17.3%となっている。さらにABCの数値を年齢ごとに比較してみると、図2のとおりAでは0～1歳児で25%、2歳児で25%、3～4歳児・異年齢で5%となっており2歳児までの数値が高い。Bでは0～1歳児で67%、2歳児で64%、3～4歳児・異年齢で62%となっており、どの年齢も高い数値を示している。またCでは0～1歳児で8%、2歳児で11%、3～4歳児・異年齢で33%となっており、3歳以上児の数値が高くなっている。

これらの結果を分析すると、図1からは、オノマトペ絵本は一般的に乳児用の絵本というイメージがあるが、どの年齢の子どもたちも60%以上がオノマトペの持つ言葉の楽しさや面白さに魅力を感じているのが読み取れる。また図2の結果、Aでは乳児が3歳以上児の5倍の数値を示している。低年齢児ほどオノマトペからの発声への影響が大きいが読み取れる。これはオノマトペが単純な言葉(もこ・かん・ころ)であり、乳児が発音しやすい音(ぼ・か)で構成されているからだと考えられる。乳児は保育者の真似から始まり、繰り返しの言葉の模倣が盛んになってきて保育者と声を合わせ発声する様子が多く見られた。その発声が徐々に正しい言葉の発声につながるきっかけとなっていると考えられる。

またBではどの年齢も高い数値を示しており、図1の結果と同様にすべての子どもたちがオノマトペを楽しんでいる様子がうかがえる。具体的な子どもの反応は、乳児では読みに合わせて左右に身体を動かす、ニコニコして見る、手をたたく、頬を膨らませる、指をさして発声するなど、身体全体で言葉のリズムをつかむことが読み取れた。このことから、乳児には子どもがつかみ取りやすいリズムミカルさや音を視覚化した絵を挿入したオノマトペ絵本の選択が大切になると考えられる。また3歳以上児は読後に口ずさむ、集中して見る、保育者との言葉の掛け合いを楽しむなど楽しみ方が変化してきていた。これはオノマトペを一度自分の中に受け取り、想像し楽しんでいるのではないかと考えられる。いわゆる一つの意味ある言葉として獲得し想像を膨らませている状態である。例えば「ぶきゃぶきゃぶー」と読んだとしたら10人の子どもは10種類のイメージを頭に浮かべ想像の世界を楽しんでいるのであろう。

Cでは3歳以上児の数値が乳児に比べ2倍高い。このことから、文章では伝えられない微妙なニュアンスや響きを年齢が上がるほどオノマトペから楽しむ様子が読み取れる。保育現場では年齢があがるにつれて、絵本の選択は物語性があるものや科学的な絵本等、ジャンルが数多くなり選定もそれに準じて行われている。しかし、子どもたちに人気のある絵本の中には、意味不明な音が出て来る本やナンセンス絵本などがある。過去の経験だが4歳の男児で、ほとんど絵本の読み聞かせに興味を示さない子どもが特定の絵本のオノマトペの所だけはいつも一緒に読んでいた記憶がある。そのページが近づくと、ちゃっかり側にいる。彼の頭の中で今何が想像されているのだろうと、よく思ったものだ。子どもには大人には理解できない不思議な楽しみ方のツボがあるようだ。そしてオノマトペは言葉の持つ豊かな想像力や楽しみ方を誘い出すツールにもなっているようだ。古市の論文³から、絵本にみられるオノマトペの使われ方の10個のカテゴリで考察すると、乳児ではオノマトペから音・声の再現や様子の描写等を楽しみ、3歳以上児になると言葉遊び・動きを表す・大小/速遅/重軽・予期/期待/連想・心の状態など複雑な感覚をオノマトペから感じ取り楽しんでいるように考えられる。また古市は、「オノマトペを子どもの場合は感覚的であるからこそ、直接的に受け入れられ、表現ツールとして大きな価値を持つ。短い言葉でありながら、文章としての価値もあり、文章よりも強烈に心に残る」とも述べている。今回の調査は保育科2年生35人が保育所・幼稚園・幼保連携型認定こども園等の実習時にオノマトペ中心の絵本を読み聞かせをした際の実施アンケートの結果から分析を行った。最も読まれた本が「もこもこもこ」8冊でほとんどの園に蔵書があつて評価が定着しており、学生が一度は読んだことがあるため選択しやすかったからだと考えられる。またそれ以外にも各園には数は多くないがいくつかのオノマトペ絵本があつたが、学生の選択したものは「がたんごとんがたんごとん」4冊「ころころころ」2冊と定番に近いものが多かった。さらに対象はほとんどが乳児「0～2歳児：25冊 3～異年齢児：10冊」で5歳児クラスでの読み聞かせは0件だった。これは学生のオノマトペ絵本の種類などへの知識がやや不足していたとも捉えられる。

³ 古市久子 2014年「こどもの動きを引き出すオノマトペ絵本」東邦学誌 第43巻第2号 87頁-104頁

図1 ABC項目別の比較

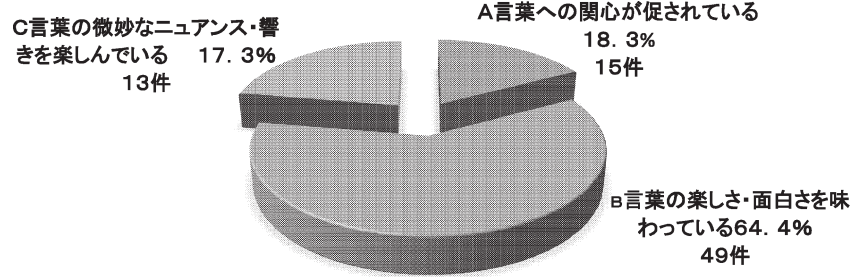
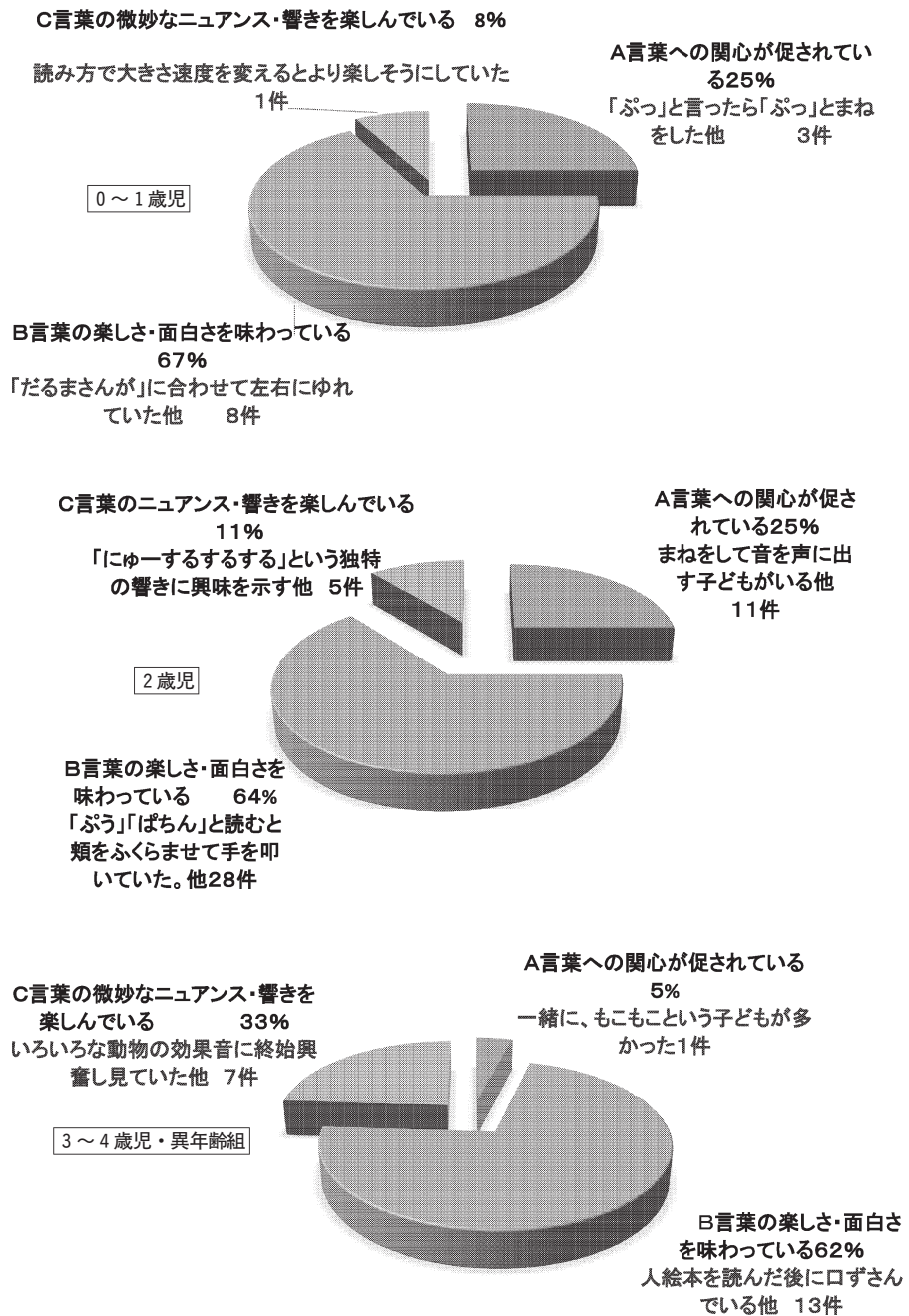


図2



Ⅶ. 考察

1. アンケート結果を踏まえて

学生のアンケートにも、絵本の読み聞かせにおいて、子どもがオノマトペに反応して身体を動かしたり、発声したりする様子が記録されている。今回の研究で注目したのは、「発声」が見受けられる点である。

身体全体でオノマトペを受け止めた子どもは、保育者の言葉を真似て発声しようとする段階に進んでいると考えられる。ここに、「言葉の獲得」の兆しがある。

「オノマトペ絵本」は、前述したように、単純な言葉であること、発音しやすい音で構成されていること、リズムがよいことなどから、赤ちゃん絵本として分類されることが多い。「0, 1, 2歳用」と表示された絵本もある。もちろん、そうだからといって、3歳以上に読み聞かせをすることが不適切だというわけではない。アンケートの結果からは、年長児になると微妙なニュアンスを感じ取り、楽しむ様子も見受けられる。ただ、物語性をあまり持たない「オノマトペ絵本」は3歳以上の子どもにはそれほど積極的に読み聞かせをしていないのではないかと推測する。実際に、実習先の園で「3歳以上に読むことは殆どない」と言われた学生もいる。

また、何園かの園長先生に伺ったところ、絵本の購入に際して「言葉の獲得」と絵本の関係性を意識することは殆どなく、したがって、「オノマトペ絵本」を計画的に、「言葉の獲得」の補助教材として購入することもないとのことであった。また、3歳以上の子どもたちに与える絵本としては、物語絵本の割合が多くなるということも伺った。物語絵本によって、子どもの感性を育てることに重きがおかれていくのである。だが、豊かな表現へとつながっていくことを考えると、ある一定の割合で「言葉」という点を意識した絵本の選定というものが重要である。豊かな表現は、一つには「修飾語」を上手に使うことで生まれる。オノマトペは多くの場合、「修飾語」にあたりと前述した。例えば、「ザーザー」というオノマトペを子どもが知り、「ザーザー」とオノマトペを話すだけでは、「言葉を獲得」したことはない。真似をして発声しているだけである。

・雨がザーザーと降っている。

というように、適切に使うことができ真に「獲得」したと言える。子どもが覚えたオノマトペを適切に使うことができるようにする一つの手段として、優れたオノマトペを使った物語絵本などを選択することは必要になる。

2. 小学校との関連からの考察

小学校国語では、1年生から物語だけではなく、様々な教材に触れることになる。具体的に見ていくと小学校国語の新教育要領では、言語について次のように記されている。

第3章 各学年の内容

第1節 第1学年及び第2学年の内容

[知識及び技能]

略

⋮

(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。(p.50)

イ. 長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気付くこと。(p.51)

言葉遊びとしては、いろはうたやかぞえうた、しりとりのやなぞなぞ、回文や折句、早口言葉、かるたなど、昔から親しまれてきたものが考えられる。また、地域に伝わる言葉遊びに触れたり、郷土のかかるたで遊んだりする活動を通して地域特有の言語文化に親しむことも考えられる。

言葉の豊かさに気付くとは、言葉のリズムを楽しんだり、言葉を用いて発想を広げたり、言葉を通して人と触れ合ったりするなど、言葉のもつよさを十分に実感することである。

(小学校学習指導要領解説 国語編 p.39, p.50, p.51 平成29年6月)

幼稚園教育要領等で強調された

「(4) 言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。

- (5) 幼児(子ども)が日常生活の中で文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心を持つようにすること。」

という内容は、小学校で発展的に指導されることになる。幼稚園等の学びから小学校で「言葉のもつよさを実感する」ためには、ただ、絵本の持つ物語性や、子どもが興味・関心を持つものだけを与えては不足である。保育者が、きちんとした目的のもとに、子どもの発達段階に応じた絵本を、絵本の購入時から選定する必要がある。

VIII. オノマトペ絵本の使用例……「オノマトペ」のみの絵本から、オノマトペを使用した物語絵本へ

では、具体的に絵本を例にあげて、読み聞かせを考察する。

1. オノマトペのみを使用した絵本

- (1) 『もけら もけら』(山下洋輔・文 元永定正・絵 中辻悦子・構成)福音館書店
『もこ もこもこ』と同じ、元永定正の絵による絵本。山下洋輔が不思議なオノマトペをつけている。
「もけらもけら」と動き出した不思議な生物たちが、次々に動き出すような感覚が楽しい。
- (2) 『もいもい』(作 市原 淳、監修 開 一夫)ディスカヴァー
「もいもい」「もいもーい」「もーいもーい」というような、単純な音のオノマトペに、目玉を思わせるような、インパクトの強い絵と組み合わせられている。
はっきりとした色使いもあいまって、子どもがくぎづけになる絵本といわれる。

2. オノマトペとストーリー性のある絵との組み合わせからなる絵本

- (3) 『がたごと がたごと』(内田麟太郎・文 西村繁男・絵)童心社
電車にお客さんがぞろぞろ乗り込んで、がたごとがたごとと電車が動き出した。がたごとがたごと、電車は走り続ける。
「がたごとがたごと」のオノマトペだけで物語は続くが、絵を見ながら子どもたちとお話を楽しみたい。
- (4) 『ぼぼぼぼぼ』(五味太郎 作)偕成社
(3)『がたごと がたごと』のように、「ぼぼぼぼぼ」と汽車が進む。トンネルを抜け、山を越えていく汽車を、「れれれれれ」「るるるるる」と、追いかけてみたい。

3. 物語の中で、オノマトペが効果的に使われている絵本

- (5) 『すっすっはっはっ こ・きゅ・う』(長野麻子・作 長野ヒデ子・絵)童心社
毎日の生活の中で、あまり意識することのない呼吸を、「すっすっはっはっ」とオノマトペを使って表現し、「呼吸や声の素晴らしさを感じよう」と、作者が呼びかけている。
- (6) 『かわうそ3兄弟』(あべ弘士 作)小峰書店
愉快なかわうそ3兄弟の姿を、あべ弘士の確かな観察の眼が表現している。大きい兄はニュニューと登場し、ザバーンと飛び込んでグイグイグイと泳いで行く。一番ちいさな弟はペコッと登場し、ポチャンと飛び込みクネクネ泳ぐ、というように、身体の大きさでオノマトペが変わる点に注目して読みたい。
- (7) 『おっとせいおんど』(神沢利子・文 あべ弘士・絵)《こどものとも》傑作集、福音館書店
神沢利子のリズムの良い文に、あべ弘士が愉快なおっとせいの姿をつけた絵本。「なつが きた きた きたのしま」「はっけよい そら おせ どんと おせ」「どーなつ ならんで どんぶらせ あ どんぶらせ」「オットセイセイセイ、オットセイセイ、オットセイセイセイ、オットセイセイ!」というように、オノマトペがそのまま音頭の歌詞になり、子どもと一緒に歌ってみたい絵本である。(絵本の最後に、矢野顕子の作曲による楽譜「おっとせいおんど」が載せられている。)
- (8) 『くんくんくん おいしそう』(阿部知暁 作)福音館書店
アフリカに住むゴリラが「くんくんくん いいにおい」と、かおりにひかれて歩いていくと、おいしそうな果物を見つけた。むしゃむしゃ食べていると「くんくんくん いいにおい」と、チンパンジーたちもやってきた。そこへ、ゾウも「くんくんくん いいにおい」とやってきた。お腹いっぱい果物を食べたら、帰りがらうん

ちを「ポロポロ」「ポロ ポロ ポロ」「ポットン ポットン ポットン ボトトーン」。うんちから、やがてちいさな 芽がでてきて、やがて新しい果物の木となっていく。オノマトペを楽しみながら、自然の仕組みを知ることができる。

(9) 『ももたろう』(松居 直・文 赤羽末吉・絵)福音館書店

「ももが つんぶく かんぶく つんぶく かんぶくと ながれてきました。」

赤羽末吉の画に伴って、子どもたちは「つんぶく かんぶく つんぶく かんぶく」というオノマトペで、ももが流れてくる様子を身体で感じていく。昔話の中に、長い間使われていたオノマトペを知ることができる絵本。独特な言葉の響きを楽しむことができ、知らず知らず、子どもは伝統的なオノマトペを身に付けていく。

(10) 『雪わたり』(宮沢賢治 作)多くの画家が絵をつけ、絵本となっている。

オノマトペを作品に多く使う児童文学者として、宮沢賢治は定評がある。宮沢賢治の童話「雪渡り」は小学校の教科書にも採用されており、楽しく、印象に残るオノマトペが使われている。

「四郎とかん子とは小さな雪沓をはいてキックキックキック、野原に出ました。」

「小さな小さな鏡のようにキラキラキラキラ光るのです。」「狐こんこん狐の子、こんこん狐の紺三郎。」

オノマトペが効果的に使われることにより、堅く凍った雪の状態が想像しやすくなり(キックキックキック、キラキラキラキラ)、また冷たい空気の様子も感じられる。雪国の子どもであれば、実際に一度は体験している冬の状態である。単に「雪が堅く凍った」と表現されているより、容易に想像できる優れた描写となっている。このような例に触れることで、子どもの言葉は豊かになっていくのである。

IX. まとめ

「言葉に対する感覚を豊かにする」「豊かな表現をする」ということは、簡単なことではなく、短時間でできることではない。語彙を増やすということは、いかに多くの語彙に触れてきたかということであり、幼い時からの積み重ねが重要である。実際に、大学に入学してレポート等の作成にあたり、自分の語彙不足を認識する学生は少なくない。

子どもがオノマトペに反応し、体全体を使って受け取る様子はよく知られたことであった。子どもはオノマトペを受け入れやすいのである。オノマトペ絵本は、子どもの「言葉が豊かになる」ためにふさわしい児童文化財であり、年齢に関係なく、オノマトペ絵本をもっと読み聞かせていくことが大切である。多くのオノマトペに触れることで子どもは自分の語彙を、知らず知らずのうちに増やしていく。また、優れた物語の中で使われているオノマトペにより、子どもはオノマトペを使う表現の豊かさに触れ、自分のものとしていくことができる。そのことが、子どもの「言葉を豊か」にし、さらに「豊かな表現」へとつながるのである。これからの保育を学ぶ学生や保育現場に向けて、オノマトペ絵本を乳児向きと捉えずに、3歳以上児にも積極的に触れる機会を多く持つことを提案したい。

参考文献

1. 岸井勇雄 武藤 隆 柴崎正行(監修)太田光洋(編著)内藤由香子 他(著) 2009年 保育・教育ネオシリーズ(20) 保育内容・言葉 「株式会社 同文書院」
2. 窪菌晴夫 編 2017年『オノマトペの謎 ピカチュウからモフモフまで』岩波科学ライブラリー-261 岩波書店
3. 近藤 綾・渡辺大介 2008年「保育者が用いるオノマトペの世界」 広島大学心理学研究 第8号 255頁-261頁
4. 谷田貝公昭(監修) 中野由美子 神戸洋子(編著) 2010年『新保育内容シリーズ4 言葉』一藝社
5. 三好行雄 2002年「乳幼児言語研究 ― 1～2歳児における発声語の文法的特質② ―」武蔵野短期大学研究紀要<第16輯>25頁-34頁
6. 小椋たみ子・吉本祥江・坪田みのり 1997年「母親の育児語と子どもの言語発達、認知発達」神戸大学発達科学部研究紀要 第5巻 第1号 1頁-14頁

〈資料……学生が読み聞かせた絵本一覧〉

1. 安西水丸 作 1987年『がたんごとんがたんごとん』福音館書店
2. 市川真由美 文・山本 孝 絵 2017年『にんじゃつばめ丸はつにんむの巻』プロンズ新社
3. 岩田明子 作 2009年『ばけばけばけばけばけたくん』大日本図書
4. かがくいひろし 作 2008年『だるまさんが』プロンズ新社
5. かがくいひろし 2009年『だるまさんと』プロンズ新社
6. 木曾秀夫 作 2011年『しっぽ しっぽ しっぽぽ』フレーベル館
7. こいでやすこ 作 2002年『かさかしてあげる』福音館書店
8. 五味太郎 作 1991年『かかかかか』偕成社
9. 多田多恵子 文・齋藤正光 絵 2003年『はっぱ はらっぱら はっぱっぱ』福音館書店
10. 谷川俊太郎 文・元永定正 絵 1977年『もこ もこもこ』文研出版
11. 谷川俊太郎 文・中辻悦子 絵 1998年『よるのようちえん』福音館書店
12. 丹治 匠 作 2016年『かあかあもうもう』こぐま社
13. 長 新太 文・絵 1984年『ごろごろ にゃーん』福音館書店
14. 長 新太 文・絵 1989年『にゅーするするする』福音館書店
15. つきおかゆみこ 作 2014年『おりがみにんじゃ』あかね書房
16. とよたかずひこ 作 2006年『ももちゃん ぽっぽー』童心社
17. なかえよしを 文・上野紀子 絵 2006年『ねずみくんとシーソー』ポプラ社
18. のむらさやか 文 川本 幸・制作 塩田正幸・写真 2010年『かんかんかん』福音館書店
19. 林 明子 作 1986年『きゅっきゅっきゅっ』福音館書店
20. 松谷みよ子 文・東光寺啓 絵 1969年『おさじさん』童心社
21. 三浦太郎 作 2011年『りんごがコロコロ コロリンコ』講談社
22. 元永定正 作 1984年『ころころころ』福音館書店
23. 山下洋輔・文 長 新太・絵 1995年『ドオン!』福音館書店
24. 山下洋輔 文・むろまいこ 絵 2016年『ぼくのいちにちどんなおと』福音館書店
25. シェリー・ダスキー・リンカー 文・トム・リヒテンヘルド 絵・福本友美子 訳 2012年『おやすみ はたらくる
またち』ひさかたチャイルド